

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2006年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学研究科	組織神学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	立教大学大学院文学研究科組織神学専攻	竹原 創一 印	
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ (人文)	<b>個人・共同の別</b>	(個人) ・ 共同 名
<b>研究課題名</b>	デシデリウス時代のモンテカッシーノ修道院 一造形芸術と改革プロパガンダー		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学大学院文学研究科組織神学専攻博士後期課程3年	吉田 祐子 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
<b>研究期間</b>	2006	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、キリスト教史の側面から、西欧中世という時代特性を明らかにすることを目的としている。方法としては、美術史（西欧絵画）と神学（ローマ教皇史・修道院史）の両面からのアプローチにより、とくにグレゴリウス改革期における時代性を考察する。具体的に採り上げる作品は、教皇庁のあるローマを含めた中部、および南イタリアの、この時期の代表的な教会堂の壁画群であり、それらの造形特性を探ることが主眼である。その中枢には、ベネディクト会修道院の存在が無視し得ない重要性をもって君臨している。同修道院は、改革期の教皇庁の精神的支柱でもあり、改革にその名を冠するグレゴリウス七世の頼もしいブレーンでもあった。その修道院の芸術が目指した造形志向を探ることは、とりも直さず、この当時西ヨーロッパ全土を巻き込んだ教会の改革とその社会の姿を明らかにするうえで、確かな一助となる。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ グレゴリウス改革 ] [ ベネディクト会修道院 ] [ イタリア中世絵画 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

当該研究は、「ベネディクトゥスの世紀」と呼ばれた初期中世、西ヨーロッパ・キリスト教世界のほぼ全域に多大な影響をおよぼした、ベネディクト会修道院の歴史的役割を考察するものである。とりわけ、その造形作品の側面から、同修道院が果たした宗教的・社会的・政治的な役割を明らかにしたうえ、ひいては時代性や地域性をも浮き彫りにすることを目的としている。ここでは、同修道院の活動を代表する一時期 — 十一世紀後半のグレゴリウス改革期 — を採り上げ、とくに修道院長デシデリウス(Desiderius)の領導によって大規模な改修を果たした大修道院や、その姉妹修道院の内部装飾、およびそれらの制作年と前後する、中部および南イタリアの作品群を検証する主にその造形性について、十一世紀当時の文献資料の検討とも併せ、論述するものである。従って本研究のためには、テキストとしての一次資料、二次資料のほか、写真資料も必須であった。が、多くの場合、テキストのなかに論述されている対象の図版は、当該テキストに含まれているため、研究を進めるうえでまず第一に役立つのは、書籍・雑誌論文・海外の学位論文のコピー等であった。従って S F R 申請の折、研究経費の多くを文献購入に当てる計画を立て、それを実行した。

具体的な文献資料のうち、とくに参照・引用の頻度が高かったものを、著者名とタイトルのみ、以下に記載する。(順不同)：

- M. Manion, “The Frescoes of S. Giovanni a Porta Latina in Rome” (Ph. D. dissertation)
- H. Kessler, “Old St. Peter’s and Church Decoration in Medieval Italy”
- H. Kessler, “Seeing Medieval Art”
- H. Toubert, “Un arte orientata — Riforma gregoriana e iconografia —”
- E. Cuozzo e J. M. Martin (a cura di), “Cavallieri alla conquista del Sud — Studi sull’ Italia in Memoria di Léon-Robert Ménager —”
- E. Kitzinger, “Studies in Late Antique Byzantine and Medieval Western Art, Vol. I”
- E. Kitzinger, “Studies in Late Antique Byzantine and Medieval Western Art, Vol. II”
- H. Houben, “Mezzogiorno normanno-svevo — Monasteri e castelli, ebrei e musulmani —”
- G. Sperduti (a cura di), “De viris illustribus casinensibus”
- G. Sperduti (a cura di), “Storia dei normanni”
- Arti e Storia nel Medioevo, I, II, III, IV.

上記は、S F Rによる経費で手元に置くことが叶った資料の一部である。これらを使った結果、以下のような成果が上がった。すなわち、もっとも改革機運の高まった時期、モンテカッシーノ修道院長デシデリウスによってなされた大修道院の改築を筆頭に、中部および南イタリアにおいてベネディクト会が主導して建造させた教会堂やその内部壁画に見られる造形特性が、ローマ教皇や修道院の思想・立場を当然ながら反映していることを、より詳細に検証することが可能になったのである。各先行研究の論旨を踏まえ、自論の補強を試みるうえでも大いに役立った。

またいっぽう、聖権と同時に、広く社会的影響力を有する俗権も無視し得ない。その意味では、モンテカッシーノ修道院および教皇庁と浅からぬ因縁をもっていたノルマン人諸侯の動向も同様に採り上げ、彼らの統治政策の特性をも併せて論じなくてはならない。たとえば、その代表的事例として、既存の勢力とは一線を画するノルマン人支配者の文化政策である。十一世紀後半当時、イタリア半島では三つの異なる政治勢力が覇権を競っていた。すなわち、

- ① 東方ビザンティン帝国
- ② 神聖ローマ帝国
- ③ イタリア各地を治めていたノルマン人諸侯

これらのうち、③のノルマン人諸侯の採用した芸術表現の様式が、本研究では重要な焦点の一つとなる。というのも、彼らはこの当時 — グレゴリウス改革の機運がもっとも高まっていた時期 — 中部および南イタリア地域に破竹の勢いで台頭してきており、それゆえことに南イタリアでは、既存の政治勢力たる①と、熾烈な覇権争いを展開していた。当然、文化的にも圧倒的に優勢だった東方の影響力は、新興勢力たるノルマン人たちにとっては、いわば乗り越えるべき大きな壁であった。彼らの統治下の地域に、いかにみずからの存在感を効果的に誇示できるであろうか。

## 研究成果の概要 つづき

この課題に関与したのが、ほかならぬデシデリウス率いるモンテカッシーノ修道院であった。なぜならば、政治的手腕をも発揮していたデシデリウスは、当該地域における既存勢力と新興勢力との軋轢にもかかわらず、俗権との関係にも巧みな外交を繰り広げたからである。結論からいえば、彼は双方とうまくバランスをとり、さらには常に虎視眈々と覇権争いへの参入を狙っていた北の帝国②とも、友好関係を保つ工夫を怠ってはいなかった。それもすべて、グレゴリウス改革を背後から支え、その推進に様々な形で尽力した、教皇のブレインの一人であったデシデリウス修道院長の政策であり、そうした彼の実績を示す具体的資料や、それらを使った実証例などが、上に挙げた S F R による研究経費で入手した文献資料のなかにも、数多く見い出された。それらを筆者は自論の補強のため、執筆中の学位申請論文のなかに引用することができた。当論文は、本研究の成果を示すためのものである。

これまでに挙げた資料活用の実例は、本研究のテーマの一つであるモンテカッシーノ修道院の歴史的背景を述べ、そこから派生する各論を追求する必要性から、成果として例示したものである。では、いっぽうで「美術」に関する考察に関してはどうか。やはり上に記載した文献のうち、とくにローマの関連する造形作品や壁画群等を扱った論文、そしてほかでもないグレゴリウス改革と美術との関係を論じたモノグラフ集 — 筆者にとってはフランス語原文よりもいっそう読解が容易なイタリア語訳 — 、また東方との影響関係を論じるうえでは欠かせない上下2巻の名著、さらには、中世イタリア全般を広く扱った事典は、なかでも論文執筆のうえで頻繁に参照する必要がある、それが如実に成果に反映されている。現時点では完全な形として完成してはいないが、いずれ今年度中には提出の運びとなる予定である。

本研究の成果として、まとめつつある論文の章立ては、次のとおりである：

## 序

## 第一章 モンテカッシーノ修道院の改築

## 第一節 大修道院の再建事業

## 第二節 東西間の技術格差

## 第三節 文献史的観点からの内部装飾の様相

## 第二章 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂とモンテカッシーノ修道院

## 第一節 サンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂の美術史上の意義

## 第二節 同聖堂内部装飾の作者について

## 第三節 同聖堂内部装飾の様式について

## 第四節 モンテカッシーノ修道院写本制作工房の役割 — 壁画との関わりをめぐる —

## 第三章 サレルノ大聖堂とモンテカッシーノ修道院

## 第一節 サレルノ大聖堂の建立背景

## 第二節 同大聖堂何部装飾の制作年について

## 第三節 同大聖堂内部装飾の作者について

## 第四節 同大聖堂内部装飾とサンタンジェロ・イン・フォルミス聖堂内部装飾との関係

## 第四章 ノルマン人支配者とモンテカッシーノ修道院

## 第一節 研究史上の論点

## 第二節 ノルマン人の文化政策上の特色

## 第三節 ローマ教皇とノルマン人勢力との関係

## 第五章 ローマとモンテカッシーノ修道院

## 第一節 ローマの伝統とモザイク技術の復興

## 第二節 サン・クレメンテ聖堂アプシス・モザイクと初期キリスト教美術の復興

## 第三節 ローマ周辺の絵画様式の特色とその含意

## 第六章 モンテカッシーノ修道院の十一世紀

## 第一節 カプア、サレルノ、ローマ — それぞれのつながり —

## 第二節 モンテカッシーノ修道院とグレゴリウス改革

## 結語

このうち、S F Rによって多くの助力を得た結果、現在は序章から第四章までを完成している。引き続き、第五章以下、結語までを今年度中、具体的には十一月までに完成させる予定である。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**④その他**

学位申請論文として提出 (2007年11月を予定)  
内容は研究成果の概要に記述のとおり